

第 5 回熟議『学校選択制』（7 月 11 日）B グループ 主な意見とまとめ

【主な意見】

1 選択の機会・対象者

- 初年度 1 回でいいと思うが、個別の特殊な事情、例えばかなり高度な技術を要するクラブ活動の選手で全国大会に出られるような選手が、指導を受けてた先生が異動になり、指導を受けられないというような事情がある場合は、その先生の異動先の学校へ再度選択しなおせる等、何らかの対応ができるような含みをのこしておいてほしい。
- 入学時 1 回だが、特別な場合は除くということ。
- 中 3 の内申の相対評価が変わるのは子どもにとって大きなこと。中にはわざと狙って相対評価を上げようとする方もいるかもしれないので、一度入学してからの再選択は懸念がある。
- 現在相対評価ではなく絶対評価に移行する動きがあるので、今後はそういう懸念はなくなるかもしれない。
- 小学校 1 年生についてはほとんど親の意見になってしまう。6 歳 7 歳の子が将来の夢を語ったとしても、それは親の受け売りでは。大人の考えを押し付けるだけになりかねない。
- 親の立場から選択の自由が広がることはありがたいと思う。
あらかじめ決められ学校以外にも行ける先が選べるというのは親としては歓迎されるのではないか。実際には通学距離、時間、安全性が最優先なので、隣接の学校を選ぶことが多いと思うが。
- 小学生の場合は、安全安心を中心に考えていく方がいいのではないか。
小学生の段階では見守りとか安全安心が重要なので、小学生については対象者として好ましくないと思う。
- 小学生は対象から外しても良いくらいに思う。
- 保護者の希望としては、同じ幼稚園等で仲良くしてた子どもたちと同じ小学校へ通わせたいというケースが多い。
子どもによっては集団生活に馴染みにくいような個性をお持ちのお子さんもいらっしゃる。
- 親が学校を選ぶ場合は親の責任をはっきり明確にしないといけない。送って行って、連れて帰ってくるのは親の責任でということにしなければ行政では責任が取れない。
- 子どもは入ってしまうと 1 年の時点ですぐに新しい小学校に馴染んでたりするのであまり心配はないと思う。
- 校区が広いところでは、校区の端だと子どもの足で 40 分ほどかかったりする

ところもある。そういうところは近い学校に行ける選択とか、個別のケースに対応できらよいと思う。

○ B グループとしては、選択の機会、対象者は中学生だということ。

2 選択できる学校の範囲

○ 小学生について、自由選択制にしても親としてはやはり近いところ、安全なところに通わせたいと思う。区全域となると、子どもの足によってはかなり広いので、公立の場合、電車やバスに乗ってまで良い学校へ通わせるという発想にならないのでは。自由選択制にして枠を外した形にしても、実際は隣接だったり校区の指定の学校へ行くでしょうから、あえて枠をはめない自由選択でもよいのでは。

○ 現在、通学に 40 分もかかる子どももいるときいた事がある。親にとっては安全面で何が起こるか分からないので不安がある。

○ ある程度時間をかけて通学するというのは、自分の足で歩くということも一つの教育の一環で教育的には必要だと思うが、30 分、40 分とうのは遠すぎると思う。

○ 区内に近い学校がなく、隣の区の学校の方が近い場合がある。区によっては近くに学校が固まってあって、どこの小学校も近くないところもあるのが現状としてある。

○ 小学校に関してはコンパクトな方がいい。地域密着でコンパクトな方が先生目の届きやすいし、安全安心で目をかけてもらい易いのが一番だと思う。

○ 区を超えるといろいろ問題が出てくる。地域振興会との関係や、警察も区が違うと対応してくれなかったりするのではないかな。

○ 区をまたいで学校が近くにあるのなら、行けるようにする方が子どもにとってプラスだと思う。

○ 選択制のメリットを最大限実現しようとするれば、結論としては自由選択制になると思う。その場合、区によって判断できなくなるのではないかな。

○ 今の 24 区でそれぞれ決めても、今後の区再編された時にまた制度が変わってしまう可能性がある。今大阪市として学校選択制を導入するかどうかの判断をしたとしても、それを導入する時期については今後決定していけばよいと思う。

○ 通学の問題でいうと、区の端だったら隣の市の学校の方が近い場合もあるので際限がなくなっていくと思う。

都市間で連携しているところもあるとはきいている。個別のニーズにどこまで応えていくのか。

○ 小学校と地域との関係は非常に結びつきが強いが、中学校の場合は地域との

係わりはあまりないので、自由選択制でも地域はあまり抵抗がないと思う。

3 各学校の受け入れについて

- 現在は小学校と進級する中学校の連携が図れているが、学校選択制が導入されると、それが困難になるのではないかと思う。
今の校区内での小学校、中学校は、これまでの経過も踏まえて連携ができているので、それは強みとなっているので、それが失われるのはデメリットだと思う。
- 現状でも特別支援学級に在籍している子どもの保護者の方は、中学校に上がる時に、事前に学校に來られて、特別支援学級の場所、教育内容などについていろいろ調べてから中学に進学しているので、実際には学校を選択されているケースもある。
- 選択制になると、新年度に何人の児童生徒が入学してくるか予測が困難になる。学校側からすれば、早めに掴んでおく必要があるのでは。
- 先生方が日々安定して、精神的にも時間的にも余裕がないと、かえってマイナスを招いてしまう。学校現場が落ち着ける方法をとらなければならないと思う。

4 学校選択のための情報提供・希望調査・抽選

- 現在でも教育内容等については丁寧な説明を心がけている。
中学校の場合だと、校区の小学生が6年生の段階で一度中学校に來て授業体験やクラブ体験を行っている。
また、中学生の生徒会が小学校へ出向いて話をしたりしてますので、やはり学区があって、そのつながりで知ってるお兄ちゃんお兄ちゃんが学校へ説明にきてくれるということで安心感を持たせてくれる。現在はそういう中身の濃い学校紹介ができていいる。学校選択制になると、そういう部分が無くなってしまふのが残念だと思う。
- クラブ活動の種類が少ないことが懸念される。クラブだけ違う学校へいくとう選択もあればよいと思う。好きなスポーツが出来ないという現実もあるので解消してあげたいと思う。
- 学校選択制が導入されるとおそらく学校の成績ランキングみたいなものをどこかの機関が発表して、先生はそのランクを上げるためだけの指導を行い、弱者が切り捨てられる可能性もあるのではないか。
- 例えば立地条件であるとか、学校の努力だけではどうにもならないところで選択されていくのは学校としては辛いところだと思う。
- 小中学校は高校のように受験にすることはできなが、子どもとしては抽選で落ちるのは納得いかないのでは。逆に勉強で落ちたのなら納得いくと思うが。

- 抽選で落ちた場合のショックはかなり大きいと思う。どうしてもその学校でクラブ活動をしたかった場合、後々の影響が大きいと思う。実力で落ちたのなら納得出来ると思うが。
- 学校の希望があふれている状況で、いじめなどの非常に重たい理由で校区の学校へ行けない場合も抽選となると問題だと思う。今だと指定外就学で認められる。